

一 般 演 題 抄 録

18. 当院における内観療法の試みについて (適応への考察)

東 睦広 岡田 章 人見 一彦

近畿大学医学部精神神経科学教室

内観療法は浄土真宗の身調べに由来した日本独自の精神療法として知られている。吉本伊信が宗教色を排して一般に広げ、日本内観学会、日本内観医学会の発足を機に、精神医学的に理論構築や適応の拡大がなされるようになった。内観療法は幼少時から順に、重要なかわりのあった人物を対象として「してもらったこと」、「してかえたこと」、「迷惑をかけたこと」を想起する。その結果基本的信頼感の再確認、個の自立がうながされ、身体表現性障害、アルコール依存症、統合失調症や不登校、心身症などのさまざまな病態に効果があると言われている。当院のメンタルヘルス科においても、主に神経症圏に対して施行しているが、日常臨床に積極的に応用するためには未だ明確な適応疾患の基準が定められているとはいいがたい。そこで当院施行例11例における不変、悪化例6例を中心に従来の適応基準と比較して、その心理的背景などを調査し考察をおこなった。1995年、鳥取大学の川原らは、内観療法を神経症性障害の23例に対して施行したところ実に21例に有効以上の効果があったことを報告している。しか

し、2002年までに当院で施行した11例においては、著効例2例、やや有効3例、不変、悪化例6例と川原らの報告と差異があった。当院施行例について心理的背景を調査したところ、著効例では、親の養育態度も良好で生活歴においても特記すべきことはなかったが、不変悪化例においては、症例自体の情緒不安定性障害などの人格障害の2軸診断、親による虐待体験、親が多額の借金を作っていた事や、両親の人格障害、経済的問題など、心理社会的因子としては、基本的信頼感の再確認をおこなうには不利な条件が認められていた。当院施行例から、従来の内観療法の適応例においても、人格障害の存在、幼少時からの不適切な養育環境や、劣悪な対人関係、さらには、経済的な問題などのネガティブな心理社会的因子が存在すれば、治療効果が期待できないこともあることが明らかとなった。そのため、今後内観療法を積極的に行うためには、心理社会的因子を考慮した適応基準を設定することの必要性が示唆された。

19. 脊髄小脳変性症に対する経頭蓋連続磁気刺激治療

山田 郁子 寺内 一真 三原 雅人 目黒 登紀 三浦 浩介 中村 雄作

近畿大学医学部堺病院神経内科

近年、パーキンソン病、脊髄小脳変性症などの神経内科疾患に対する経頭蓋連続磁気刺激治療 (rTMS) の有効性が報告されているが、今回我々は以下の方法で、rTMS の脊髄小脳変性症に対する治療効果を検討した。対象は厚生省特定疾患運動失調症調査研究班の重症度分類で1度から4度までの脊髄小脳変性症31名である。(うち7名は2回磁気刺激治療施行した)。臨床病型はSCA3 5名、SCA6 3名、孤発性CCA 6名、孤発性OPCA 17名であった。治療には刺激コイルにダブルコーンコイルを使用し、刺激強度には後頭孔運動域を測定し、その80%後頭孔運動閾値を用いた。後頭孔運動閾値測定不可能例には、Magstim 200の45%強度、Magstim Rapidの53%強度を用いた。刺激頻度は0.4 Hz、0.8

Hz、1 Hz のいずれかで、刺激回数は左右小脳それぞれに100回ずつ、1日200回、またはInionと左右小脳に100回ずつ、1日300回とし、週に6日、2週間行った。結果は脊髄小脳変性症31名のICARSは治療前後で平均50.6点から33.2点に改善した。歩行障害、運動機能、言語障害で有意な改善を認めた。重症度分類で中等度障害患者でも有意な改善を認めた。臨床病型ではOPCA、CCAともに改善を認めたが、OPCAでより有意な改善を認めた。刺激回数は200回より300回、刺激頻度は0.8 Hzより1 Hzで有意な改善度が得られた。rTMSは脊髄小脳変性症に臨床的に有効であったが、その機序の検討はさらに必要である。